

Title	挨拶表現における”タ”と”ル”両形式の語用論的研究
Author(s)	徐, 雨蓁
Citation	日本語・日本文化. 2009, 35, p. 27-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9209
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈研究論文〉

挨拶表現における“タ”と“ル”両形式の 語用論的研究

徐 雨葵

1. はじめに

周知のように、文末に現れる“タ”形と“ル”形の両形式の使用は、通常、事態が「過去」のものであるか、「非過去」のものであるかによって使い分けられると説明されている。しかしながら、上述の規則に従う両形式の使い分けが明確に存在するとは言い難い言語事実がある。その一つとして、日常生活の中で多用される挨拶表現¹⁾(つまり、感謝表現、謝罪表現、労いの表現、祝福表現、別れの表現)における両形式の使い分けがある。本稿では、これらの表現の両形式の使い分けの要因を語用論的に考察する。以下では、日本語の挨拶表現を、感謝・謝罪、労い、祝福、別れの四つの場合に分けて見ていく。

2. 感謝・謝罪の場合——「ありがとうございました、申し訳ありませんでした・すみませんでした」「ありがとうございます、申し訳ありません・すみません」

2.1 問題提起

まず、感謝表現「ありがとうございました」と「ありがとうございます」、謝罪表現「申し訳ありませんでした・すみませんでした」と「申し訳ありません・すみません」という両形式の使用状況を取り上げ、問題点の所在を明らかにする。

通常、感謝表現や謝罪表現では「感謝・謝罪する事態の発生時」を基準にして“タ”形と“ル”形を使い分けしている。例えば、

- (1) 「明日迎えに行きますから、心配いりません」「そうですか。助かります。
本当にありがとうございます」

- (2) 「今度の週末は仕事が入って参加できなくなりました。申し訳ありません」
- (3) 「お茶をどうぞ」「ありがとうございます」
- (4) (電車の中で他人の足を踏んでしまったときに) あっ、すみません。
- (5) 「先日、お世話になりました。ありがとうございました」
- (6) (電車の中で他人の足を踏んでしまった時にすぐに謝罪した人が、電車を降りるときに頭を下げながら再度謝罪して) 本当に申し訳ありませんでした。

テンスの観点から、(1) (2) のように〈発話時以後〉に起こるのであろうことに対し感謝・謝罪する場合や、(3) (4) のように〈発話時現在〉に起こっていることに対し感謝・謝罪する場合は、“ル”形しか用いられない。また、(5) (6) のように〈発話時以前〉に起こったことに対し感謝・謝罪する場合は、通常“タ”形が用いられる。

ところが、〈発話時以前〉に起こったことに対し感謝・謝罪する場合においては、“タ”形のみならず、“ル”形が用いられる場面が多々見られる。例えば次の(7)-(9)は、「感謝・謝罪する事態の発生時」が過去であるにもかかわらず、“ル”形を用いて表現されている。

- (7) そこへ菊が茶とようかんを運んできた。「この間はたいそう結構なご本をちょうだいしましてありがとうございます」あらためて菊は礼を言った。
(三浦綾子『塩狩峠』)
- (8) 大野さん、本当にあのときはすみません。お店の方もかなり迷惑そうでした。
- http://www8.big.or.jp/~lupin3/communication/off/kantou-mini1/kantou-mini1_1.html
- (9) 藤田「いやいやもう、その節はどうも失礼しました」／昭男「そうですか、あんたまだ生きとったんですね」／藤田「恥ずかしながら、その節は本当に申し訳ありませんでした」／昭男「痛かったなあ、あんたのピントは」／藤田「いやいやもう、申し訳ない。もうこの通りです」

(山本洋次・朝間義隆『息子』)

以上のように、感謝・謝罪表現における両形式の使用に関して、単に「感謝・

謝罪する事態の発生時はいつか」という点だけを観察するのでは不十分であると思われ、それ以外の条件も考慮する必要があると考えられる。

2.2 先行研究とその課題

以下は、感謝表現と謝罪表現における“タ”形と“ル”形の両形式の使用に言及する研究を取り上げる。

2.2.1 金田一秀穂 (1987)

金田一 (1987) は、感謝表現の両形式 (つまり、「ありがとうございました」と「ありがとうございます」) の使い分けについて、次のように述べている。

通常、自分の感謝の気持ちが完了していると考えれば「マシタ」を使い、これからも続くと考えれば「マス」を使う、と考えられやすいが、それだけでもない。例えば、「マシタ」の方がていねいな印象をうけることが多い。そのことは、完了した気持ち、と矛盾しそうだ。また、あいさつのもととなる行為 (以後、仮に原行為と呼ぶことにする) が、完了したか、まだ続いているのか、あるいは未来のことなのか、ということも関係しているだろう。

(金田一 1987: 76)

つまり、「発話の現場での話者の感謝の意が終了しているか否か」や「話者が丁寧な印象を与える表現を使うか否か」²⁾、「原行為が完了したか、それとも、継続しているか」、「原行為が未来のことか否か」が感謝表現の両形式の使い分けの要因とされている。また、上記の考え方は、謝罪表現の両形式 (つまり、「申し訳なかった」と「申し訳ない」) の使い分けに対する説明にも有効であると述べている (p. 77)。

しかし、上記の (7)-(9) のように、〈発話時以前〉に起こったことに対し感謝・謝罪する場合において、“ル”形が用いられる理由を、上述の金田一説 (つまり、「発話の現場での話者の感謝の意が終了しているか否か」という要因) で解釈すれば、次のような矛盾が生じる、と本稿は考える。

- (10) そこへ菊が茶とようかんを運んできた。「この間はたいそう結構なご本をちょうだいしましてありがとうございました」あらためて菊は礼を

言った。

- (11) 大野さん、本当にあのときはすみませんでした。お店の方もかなり迷惑そうでした。
- (12) 藤田「いやいやもう、その節はどうも失礼しました」／昭男「そうですね、あんたまだ生きとったんですね」／藤田「恥ずかしながら。その節は本当に申し訳ありませんでした」／昭男「痛かったなあ、あんたのペンタは」／藤田「いやいやもう、申し訳なかった。もうこの通りです」

(10)–(12) のように、(7)–(9) の状況を“タ”形で発話した場合、これらの“タ”形表現で「発話の現場での話者の感謝・謝罪の意が終了している」のであれば、“タ”形表現は“ル”形表現と比べて丁寧ではなく、失礼な表現となるのではないだろうか。しかし、実際にはそうではない（脚注2において、金田一自身も指摘したように、表現上、“タ”形のほうが“ル”形より丁寧であるとされている）。つまり、感謝・謝罪する事態の発生が過去にあったにもかかわらず、“ル”形で表現される要因は「発話の現場での話者の感謝・謝罪の意が終了していない」ということではないようである³⁾。そして、(7)–(9) のような場合に“ル”形がなぜ用いられるのかについて、金田一（1987）では詳細な説明はなされていない。

2.2.2 森田良行（1988）

森田（1988: 179）は、日本語の“タ”が「確述意識、つまりその事柄が間違いなく成り立ったものとして述べる意識」の表れであるとしている。よって、「ありがとうございます」が「ありがとうございました」と“タ”を付けて言うと、その感謝の気持ちが間違いなく述べられる状態になったと意識の上で発せられる。それは、相手の親切な行為を確かなものとして捉え、間違いなく感謝の気持ちが成立したのだという確述意識に根ざしていると考えられる。

しかし、上記の(7)–(9) のような場合に“ル”形がなぜ用いられるのかについては言及していない。

2.2.3 寺村秀夫（1984）・工藤真由美（1998）

寺村（1984: 89–94）は、ある事柄に対する話者の主観的な判断あるいは評価を表す類の文において、両形式の使用は「主観的な判断の部分」と「その判断の対象・内容であるコト」の两部分に関係するとしている。また、「テンスは、その

两部分に関係するが、判断部分が判断時、つまり現在の形をとるときと、判断内容であるコトのテンスにいわば引きずられる場合がある(p. 92)」と指摘している。

寺村(1984)の立場に賛同するものとして、工藤(1998)は、時間の中でのアクチュアルな展開性のない〈非動詞的述語＝存在・状態・特性・関係・評価を表す述語〉における“タ”と“ル”両形式の使い分けは「話し手の判断時に焦点をあてるか、判断の対象となる事象の生起時に焦点をあてるか(p. 77-78)」という選択であるとし、そして話者の焦点のあて方の違いによって両形式を相互に入れ替えてもよいと述べている⁴⁾。即ち、この〈非動詞的述語〉の“タ”形と“ル”形の使い分けは、「判断の対象となる事象の生起時」という側面が前景化するか、「話し手の判断時、〈発話時現在〉」という側面が前景化するかの現れである。

本稿では、工藤(1998)の指摘に対して基本的に賛同するが、この指摘が十分ではないと考えている。その理由を以下に示す。工藤(1998)の説明を換言すると、〈発話時以前〉に起こったことに対する感謝・謝罪の場合、つまり「感謝・謝罪する事態の発生時、〈発話時以前〉と「感謝・謝罪を述べる側の判断時、〈発話時現在〉」に時間的なずれが生じる場合においては、感謝・謝罪を述べる側の焦点の置き方によって両形式とも使用可能になると考えられる。つまり、感謝・謝罪する事態の発生時が過去である場合においては、話者の焦点の置き方によって“タ”と“ル”両形式の置き換えが必ずできるということになる。しかし、実際にはそうとは限らない。例えば、次の(13)-(15)のように、“ル”形に置き換えると不自然になることがあるのである。

- (13) a. 鈴木建設本社・社長室／楽しそうに電話をかけている一之助。／一之助「実は先日の写真が出来たのでお渡ししたいと思ひまして。おそれいりますがお勤め先のお電話番号を」／みち子の声「000のxxxxよ。電話して営業三課の浜崎といえばいいわ。もう一回いうね。000のxxxx番よ」／メモ用紙に電話番号を走り書きする一之助。／一之助「ありがとうございます。失礼します」／みち子の声「気がねしないでまたきてね」／一之助「ええ、是非またお願いします」／一之助、受話器を置く。
(山田洋次・桃井章『釣りバカ日記』)

- b. ?……。／一之助「ありがとうございます。失礼します」／……。

- (14) a. 「一度、呼ばったんでもや。山さでも行ったんでると、待ってもろうたんでも、暗くはなるし、思い返して呼ばって見たば、眠っとるってもんだしの」「そうですか、すみませんでしたね。眠ったつもりじゃなかったが、つい眠ったんだ」 (三木卓『鶉』)
- b. [?]「……………」 「そうですか、すみませんね。……………」
- (15) (電車の中で他人の足を踏んでしまった時にすぐに謝罪した人が、電車を降りるときに頭を下げながら再度謝罪して)
- a. 本当に申し訳ありませんでした。
- b. [?]本当に申し訳ありません。

以上のように、〈発話時以前〉に起こったことに対する感謝・謝罪の場合において、工藤(1998)では、どういう状況で“ル”形に置き換えられる(両形式とも使用可能)か、どういう状況で置き換えられない(“タ”形しか使用できない)かについては言及されていない。また、同じ発話状況での両形式の使用が可能である場合において、“ル”形の使用から生じる表現効果との関連も検討されていない。

2.3 両形式の使い分けの要因

前述において、〈発話時以前〉に起こったことに対する感謝・謝罪の場合、通常“タ”形が用いられる傾向が強いものの“ル”形でも感謝・謝罪が行われることがある。“ル”形が使用可能なのは、工藤(1998)で指摘されているように、「感謝・謝罪を述べる側の判断の現在性」という側面が前景化しているためである。では、どういう背景のもとで、その側面が前景化して“ル”を用いて感謝・謝罪しているのだろうか。

先ほど取り上げた(7)-(9)のように、〈発話時以前〉に起こったことに対してあえて“ル”形が用いられる理由について、日本語母語話者から独自に調査したところ、「ありがたい」「すまない」と思う気持ちが〈発話時現在〉においても存在していることを表現したいときには“ル”形を用いて感謝・謝罪することが可能であることがわかった⁵⁾。この母語話者の語感に基づくと、以下のことが導かれる。感謝・謝罪の意を現時点においても有することを表現したいという意識が働き、感謝・謝罪を述べる側の現時点の判断に焦点が置かれることにより、“ル”

形を使用可能としている。即ち、感謝・謝罪する事態の発生時が過去にあっても、“ル”形が使用されるのは、「感謝・謝罪を述べる側の気持ちが現時点にも存在することを表現したい」という語用論的背景のもとで、「感謝・謝罪を述べる側の判断の現在性」という側面が前景化しているのである。そのため、“ル”形を用いた感謝・謝罪表現には、感謝・謝罪の継続が込められている、或いは発話の現場での話者の感謝・謝罪の意が終了していないという表現効果を有すると感じられる。同様の例をもう一例追加する。

- (16) みなさま、ありがとうございました。おかげさまで<BlueLagoonFesta'08>は、無事終了することができました。今年で、4年目のとなる本イベントですが、今まで、天候に恵まれてきましたが、今年度は、突如発生した台風の影響で、天候が不安定で、初日には、大雨・雷の中、2日目には、降水確率90%を超える中で、最期まで無事イベントを行うことができたことは、本当に、これ以上の感謝はありません。もちろん、天候が晴天に越したことはないですが、これもまた、自然の大いなる恵み。すべての、自然と悪天候の中、イベントを楽しんでくれてお客さんに、心からの感謝を送ります。本当にありがとうございます。

<http://blog.bluelagoonfesta.com/?eid=743288>

上例では、「感謝を述べる側の気持ちが現時点にも存在することを表現したい」という意識が働く」と“ル”形使用が密接にリンクしていることを、「本当にありがとうございます」の前件（＝すべての、自然と悪天候の中、イベントを楽しんでくれてお客さんに、心からの感謝を送ります）で述べられている。

裏返せば、その語用論的背景が強調されなければ、感謝・謝罪を述べる側の現時点の判断に焦点が置かれなくなり（この場合、感謝・謝罪する事態の発生時に焦点が置かれることになり）、“ル”形を使用することができない。例えば上記の(14)では、文脈上（眠ったつもりじゃなかったが、つい眠ったんだ）、「眠ってしまったこと」を表現の力点として強調しており、謝罪を述べる側の現時点の判断に焦点が置かれなくなり“ル”形を使用することができない。また(15)では、再度の謝罪からわかるように、「足を踏んでしまったこと」を表現の力点として強調しており、同様に“ル”形の使用が拒まれていると考えられる。さらに、話

の終わりまたは別れを告げる際には、通常“タ”形の使用が好まれる。例えば(13)のように「電話を切る場面」では「ありがとうございました」での発話が自然である。それは、話し終わるという行為自体が「感謝する事態、つまり相手に電話番号を教えてもらったこと」も終了させることに起因しており、表現の力点が「感謝する事態の発生時」に置かれることとなり、それが“タ”形の使用へと繋がる理由であろう。

では、下例の「ありがとうございます」の発話はどのように捉えればよいのか。

(17) (スーパーのレジで客におつりを渡したあと、店員が)

a. ありがとうございました。

b. ありがとうございます。

(18) (客がレジで支払が終わったあと、入り口の外まで客を見送っている美容師が頭を下げながら)

a. ありがとうございました。

b. ありがとうございます。

(17) (18) のように、スーパーや美容院などのサービス業で、サービスが終了したあとに用いられる感謝表現には、“タ”形のみならず“ル”形も用いられている。この二例は、(13)の発話状況と同様に、ある行為の終了（客との別れ）が「感謝する事態（今回の取引）」も終了させることで「感謝する事態の発生時」に表現の力点が置かれている状況であり、aの「ありがとうございました」の使用が適していると思われる。しかし、工藤説に則ると、この場合「感謝を述べる側の現時点の判断」に焦点が当てられているため、bの「ありがとうございます」も用いられるのである。語用論的に言うと、「感謝を述べる側の現時点の判断」に表現の力点を置き、「感謝の気持ちが現在もある」を優先的に表現する。そこから「感謝の気持ちが今後も継続する」という意味を含有し、「今後も利用していただきたい」という言外の意味も込められる。このことが“ル”形が用いられる際に、「またお越しくださいます」と一緒に用いられやすくなる理由であろう⁶⁾。

2.4 まとめ

感謝表現や謝罪表現では、基本的に「感謝・謝罪する事態の発生時」を基準にして“タ”形と“ル”形を使い分けている。ところが、〈発話時以前〉に起こっ

たことに対する感謝・謝罪の場合、“タ”と“ル”両形式とも使える状況がある。そのとき“ル”形が使用可能なのは、「感謝・謝罪の意を現時点においても有することを表現したい」という語用論的背景のもとで、「感謝・謝罪を述べる側の判断の現在性」に焦点が当てられるためである。それにより、「感謝・謝罪の継続が込められている、或いは発話の現場での話者の感謝・謝罪の意が終了していない」という表現効果を生むことになる。翻って、その語用論的背景が強調されなければ通常“タ”形が用いられる、ということが以上の考察により明らかになった。

3. 労いの場合——「お疲れ様でした・ご苦労様でした」「お疲れ様です・ご苦労様です」

3.1 問題提起

本章では、〈発話時以前〉に起こったことに対し、労う表現「お疲れ様でした・ご苦労様でした」と「お疲れ様です・ご苦労様です」という両形式の使用を語用論的に考察する。

(19) (仕事を終えて帰ろうとする同僚に対し)

a. お疲れ様でした。

b. お疲れ様です。

(20) (注文した商品が届いてきたとき)

宅配業者：ご注文の品をお届けに上がりました。

お客： a. どうも ご苦労様でした。

b. どうも ご苦労様です。

(19) (20) のように、仕事を終えて帰ろうとする同僚や荷物を届けてくれた宅配業者に、“タ”形のみならず“ル”形を用いて声をかけることもある。以下、これらの場合になぜ両形式の使用が可能となるのかについて考察を行う。

3.2 両形式の使い分けの要因

前章で述べたように、〈発話時以前〉に起こったことに対する感謝・謝罪の場合において、“ル”形使用が可能な場合、感謝・謝罪の意を現時点にも存在することを表現したいという意識が働く。この語用論的背景を労い表現に対しても適

用する。例えば上記の(19b)(20b)のように、「お疲れ様です・ご苦労様です」という“ル”形を用いる表現の使用には、二通りの理由が考えられる。

まず一つ目は、「同僚や宅配業者に対し、現在、労いの意をもっている」ということを表現したいためである。この場合、「本日の仕事」「荷物の配達」の発生が過去にあっても、「労いの言葉を受けた側の状況（同僚、宅配業者は疲れているだろう）」に対し、労いの気持ちをもっていることを表現したいため、「労いの言葉をかける側の現時点の判断」に表現の力点が置かれている。このことが“ル”形の使用と結びつくのであろう。以下に、“ル”形の労い表現が上記の理由によって用いられている用例を挙げる。

- (21) 銅打写真館・スタジオ／若い出征兵士とその家族の写真を撮っている銅打。／銅打「それじゃ行きます……（シャッターの音）終わりました」／母親「ありがとうございます」／割烹着をつけたミネがライトを消す。／送り出す銅打。／銅打「ご苦労さまです……ありがとうございます」
（黒木和雄・井上正子・竹内統一郎『TOMORROW／明日』）

(21)の「ご苦労さまです」という発話は「お客に対し、話者（銅打）が労いの意をもっている」というように感じられる。そして、この“ル”形表現は「労いの言葉をかける側の判断の現在性」という側面が前景化していることに起因していると考えられる。

二つ目は、「また明日も出勤する」「今後も宅急便のサービスの提供をお願いします」という発話背景において、その労う事態が過去のこととして終了せず、今後も継続することとして表現したいためである。語用論的に言うと、“ル”形を用いることで、労いの継続という表現効果があるかのように振る舞い、その労う事態がまだ終了していないことを暗示する。即ち、その労う事態がまだ終了していないものと想定される場合、“タ”形の使用が不適格となる。以下に、「労いの継続」という理由による“ル”形の労い表現の用例を挙げる。

- (22) (湯沸室で同僚の先輩に対し)

- a.* お疲れ様でした。
b. お疲れ様です。

(22)では、工作中的の同僚に「お疲れ様でした」と“タ”形で挨拶することは

ない。このように、“ル”形の「お疲れ様です」しか用いられないのは、同僚の仕事がまだ終了していないためであると考えられる。

その一方、(19a) (20a) のように、「お疲れ様でした・ご苦労様でした」の場合においては、「同僚が本日の仕事を終えた」「宅配業者と自分(話者)との荷物の受け渡しが既に終了した」という〈発話時以前〉に起こったことに表現の力点が置かれていると解釈できる。つまり、“タ”形で発話するのは、「本日の仕事」「荷物の配達」の発生時という側面が前景化しているのである。以下に、“タ”形の労い表現が上記の理由によって用いられる例を挙げる。

- (23) 隣の診察室から外村が出てくる。／久保、急にしゃきっとする。／久保
「お疲れさまでした。今日の予定、終了です」／外村「うん……」／と
ポケットからキーを出しなから部屋の隅に歩いていく。

(中島吾郎『誘惑者』)⁷⁾

- (24) 宴会が終わった後。／……………。キクエ「ご苦労さまでございました。
それではこちらから、お茶室の前をお通りになって、おひとりずつお帰
りなさいませ」／奥の襖をすりと開ける。

(ジェームス三木『善人の条件』)

上例も同様に、「今日の予定」「今日の宴会」という労う事態の発生が〈発話時以前〉であり、“タ”形が用いられている。

3.3 まとめ

労い表現では、基本的に「労う事態の発生時」を基準にして、“タ”と“ル”両形式を使い分けている⁸⁾。ところが、〈発話時以前〉に起こったことに対する労いの場合、“タ”形のみならず、二通りの語用論的背景のもとで“ル”でも使用可能な場合がある。一つは、労いの言葉を受けた側に対し労いの言葉をかける側が現在労いの意をもっているということを表現したい場合であり、もう一つは、労う事態が過去のこととして終了せず今後も継続することとして表現したい場合である、ということが以上の考察により明らかになった。

4. 祝福の場合——「おめでとうございました」「おめでとうございます」

4.1 問題提起

冒頭で述べたように、文末に現れる両形式の使用は、通常、事態が「過去」のものとして表されるか、「非過去」のものとして表されるかによって使い分けられると説明されている。通常、祝福する場合、祝福すべき事態は既に決まった（或いは、発生した）ことという前提がある。この前提から、祝福する際、文法的には“ル”形ではなく“タ”形が使用されるはずである。しかし次の例のように、結婚式が行われた後にもかかわらず、結婚の祝辞を述べる際、世間一般では「ご結婚おめでとうございます」が使用される。

(25) (結婚式が行われた後の一週間、結婚式に出席していない同僚 A が、結婚したばかりの同僚 B を祝福するとき)

a. # ご結婚おめでとうございました。⁹⁾

b. ご結婚おめでとうございます。

この場合、「ご結婚おめでとうございました」と祝福すると、違和感があるのは何故なのか。こういった“ル”形の使用は、日本語学習者には理解し難いところである。以下、具体的使用状況を提示しつつ、祝福表現における“タ”形（おめでとうございました）と“ル”形（おめでとうございます）の使用を明らかにすることを目的とする。

4.2 両形式の使い分けの要因

前述のように、祝福すべき事態が既に決まったこと、或いは発生したことを指す場合には、文法的に“タ”形が使用される。このことから、(25) のように、「祝福する事態」を「既に行われた結婚式や結婚披露宴」と考えれば、“タ”形の使用もあり得ると考えられる。しかし、実際には、結婚の祝辞は「結婚式や結婚披露宴」だけではなく、「結婚（生活）そのもの」に対して行われるものである。もし「ご結婚おめでとうございました」と言ってしまうと、祝福の対象となっている「結婚」が「既に行われたこと」として捉えられ、そこから「結婚式や結婚披露宴」だけに対して祝福しているという意味を誘発しうると考えられる。祝福の対象となるべき「結婚（生活）」は現在も将来も継続するものであるため、過去を表す“タ”形の使用は、適格ではなく、違和感を生じさせる。語用論的に言

うと、この場合、“タ”形を用いて祝福すると、祝福の対象となっている「結婚」という事態が過去のこととみなされ、現在も将来もその事態が継続することを願っている気持ちに反する表現となることから、その使用を避けるのであろう¹⁰⁾。また、祝福すべき事態の発生時が過去にあっても、祝福を述べる際、通常「おめでたい」という気持ちを現時点に有する。この気持ちが現時点にも存在することを表現したいことが、“ル”形使用の語用論的動機付けとなると考えられる。この点は、工藤(1998)の説明:「話者の判断時、〈発話時現在〉」に焦点が置かれることで“ル”形が用いられる、と相通じる。そして、この語用論的動機付けに起因して、“タ”形で祝福した際には、祝福の気持ちを現時点にも有することが打ち消され、「本当に祝う気があるのだろうか」と思われる可能性が生じる¹¹⁾。このことから、“ル”形の「ご結婚おめでとうございます」という表現は慣用的に用いられるようになったのであろう。同様に、「おめでとうございます」が慣用的に用いられる例をもう二つ示す。

(26) (誕生日を過ぎた後の会話)

学生：そういえば、先生のお誕生日はいつですか。

先生：一昨日が僕の誕生日だったのだよ。

学生：そうですか。存じませんでした。

a. *遅ればせながら、お誕生日おめでとうございました。

b. 遅ればせながら、お誕生日おめでとうございます。

(27) (元日からかなり日数が経った頃に、職場や学校などでの挨拶)

a. *明けましておめでとうございました。

b. 明けましておめでとうございます。

この二例のように、誕生日が過ぎた頃や、職場や学校などで会ったのが元日からかなり日数が経った頃だとしても、決して“タ”形で発話しない。“ル”形の「お誕生日おめでとうございます」や「明けましておめでとうございます」という表現は、慣用的に用いられる決まり文句のように使われている。

では、次のように両形式とも可能な発話はどう考えたらよだろうか。

(28) (レースを終えたばかりの騎手にインタビューしたアナウンサーが)

a. 優勝おめでとうございました。

b. 優勝おめでとうございます。

(29) (プレゼントの当選発表を行う司会者が)

a. 当選者発表、大阪府の阪大花子様、ご当選おめでとうございます。

b. 当選者発表、大阪府の阪大花子様、ご当選おめでとうございます。

上例のように、レースや当選発表などが行われた直後において、騎手へのインタビューや、プレゼントの当選発表において祝辞を述べる際、“タ”形と“ル”形、どちらでもよい。“ル”形が用いられるのは、「優勝した」「当選した」という祝福する事態に対して、祝福の気持ちを現時点にも有することを表現したいことが発話背景にあるためである。一方、「過去」を意味する“タ”形を用いると『レースに優勝する』『抽選に当たる』という祝福すべき事態が既に起こった」という意味を有し、そこから「その事態が既に確定した」という語用論的効果を潜在させる。即ち、この表現効果をあえて伝えたいという動機付けがあることが“タ”形使用を可能にする要件である。

4.3 まとめ

以上のことから、祝福表現における“タ”形と“ル”形という両形式の使用は、語用論的な要因に関係すると考えられる。「その事態が現在も今後も継続するように願うこと、または祝福の気持ちを現時点にも有することを表現したい」という発話背景のもとでは“ル”形が用いられる。この語用論的背景から、“ル”形の「おめでとうございます」という表現が慣用的に用いられるようになった。一方、レースや当選発表などが行われた直後において、祝福すべき事態が既に確定したことをあえて表現する場合には“タ”形が用いられる、ということが以上の考察により明らかになった。

5. 別れの場合——「失礼しました」「失礼します」

5.1 問題提起

『新明解国語辞典（第五版）』では、「失礼する」という述語は、謝罪の場合に用いられると共に、別れを告げる場合でも用いられると記述されている¹²⁾。本章では、別れの際に用いられる「失礼する」という表現の両形式の使用について考察する¹³⁾。

(30) (先輩よりも先に仕事を終え帰宅するときに)

- a. * お先に、失礼しました。
- b. お先に、失礼します。

(31) (目上の人との話を終え、電話を切るときに)

- a. * それでは、失礼しました。
- b. それでは、失礼します。

これらの例のように、仕事を終え帰宅するときや電話を切るときの別れの挨拶は、“ル”形の「失礼します」しか用いることができない。

(32) (部下が上司の部屋から立ち去るときに)

- a. 失礼しました。
- b. 失礼します。

(33) (夜遅く電話をした側が電話を切るときに)

- a. 失礼しました。
- b. 失礼します。

しかし、(32) (33) のように、別れの際、「失礼します」と「失礼しました」の両形式が共に用いられる発話場面も存在する。何故であろうか。

5.2 両形式の使い分けの要因

前節で述べたように、「失礼する」という述語は「謝罪」と「別れ」という二面性を持つ。本稿では、別れの際、同じ状況での「失礼します」と「失礼しました」という両形式の使い分けは、「失礼する」という述語がもつ「謝罪」の意味に関連していると考えられる。

別れの際に用いられる「失礼します」は、例えば (32b) では、「話者が自分から現在この場を離れたたり、帰りを急ぐのは非礼であるが、『今から出るという非礼をお許し下さい』」という謝罪の意味を表している。そして、(33b) では、「話者が話を終了し、自分が電話をかけておいて自分の方から電話を切ろうとするのは非礼であるが、『電話を切る非礼をお許し下さい』」という意で謝罪している。即ち、(32b) の「失礼します」は「今から退室することに対する謝罪」であり、(33b) の場合は「今から電話を切ることに対する謝罪」である。この考えの妥当性については、(30) (31) に見られるように、「お先に」「それでは」などの「今から何

かをする」という話者の意思を表示する表現と共に、「失礼します」がよく使われることから検証できる。以下に「失礼します」が用いられる例を挙げる。

(34) 骨箱を持った順公、位牌を持った順一、そして赤沢が火葬場から出てくる。順一、骨箱を持ってきて、順一「軽くなっちゃったなァ……」順公、骨箱を取ってハイヤーへ乗り込む。赤沢「それでは、わたしはここで失礼致します」 (松本功・田部俊行・工藤栄一『泣きぼくろ』)

(35) 鈴木邸・リビング／久江「あの、宅がでございますか。大丈夫でしょうか」／伝助の声「大丈夫です、大丈夫。今ね、ふとんに入ってぐっすり寝てるから」／久江「あらまァ、さよでございますか。お手数おかけしますが、よろしくお願い致します」／伝助の声「ええ、ええ、まかしといて下さい、じゃ」／久江「失礼致します」／気遣わしげに受話器を置く久江。 (中島吾郎『誘惑者』)

この二例において、「失礼します」が用いられるのは、「話者(赤沢・久江)が〈発話時現在〉からのこと」に対して謝罪の意を表しているからである。(34)は「今から立ち去ること」、(35)は「今から電話を切ること」に対する謝罪である。

これに対し、上記の(32a)の「失礼しました」は、「あなたの貴重な時間を私のために費やさせてすみませんでした。お邪魔しました」という謝罪の意が含まれていると解釈できる。また、(33a)の場合において、「夜遅く電話したこと」で相手に迷惑をかけたときに用いられることから推測される。即ち、「失礼しました」は「〈発話時以前〉に起こったこと」に対する謝罪であるということになる。以下に「失礼しました」が用いられる例を挙げる。

(36) 治子「ご存知でしょう。わたし、上の娘を亡くしたんです。なかなか立ち直れなかったんですけど……主人と、この下の娘のお陰で、何とかやってこられたんです。今あなたに主人を連れていかれたら……」／祐子、顔をあげる。表情に哀しい諦めの色。／治子「ごめんなさいね」／治子、丁寧に頭をさげる。／祐子、手の甲で涙を拭う。／実加、すさまじいばかりの怒りの眼で雄一を睨みすえる。／雄一、宙を睨んで動かない。／祐子、未練を断ち切るように苦しげに立ち上がり、治子に静かに一礼する。／祐子「失礼しました。もうお邪魔しません」雄一を一瞥もしない

で出ていく。

(桂千穂『ふたり』)

- (37) ところが、この日の夕方、成城の宇野家に、玉川警察署の刑事が訪ねてきた。……………。「そうですか。四谷の住所を教えてください」「修一郎がなにか…………」「御息さんがどうかしたというわけではありません。ムスタングを調べているだけですから」刑事は四谷の宇野家の住所を手帖に書きとめると、失礼しました、と言いのこして出て行った。

(立原正秋『冬の旅』)

(36) は不倫中の女性が不倫相手の奥さんに説得され去っていく状況であり、(37)は刑事がいろいろと尋ね終えて去っていく状況である。両方とも話者(裕子・刑事)が別れ際に、「自分がお邪魔したこと」に対する謝罪の意を表現したいため、“タ”形を用いた「失礼しました」が使用されている。

- (38) この1年間位の間、私の携帯に間違い電話が多くかかってきます。電話に出てみると「〇〇様でしょうか?」といった下手に出る方が多い。「えーと。間違いだと思いますよ…………」と私が言えば。「す、すみません。失礼しました」となります。

http://bonyarisamurai.at.webry.info/200512/article_11.html

(38) の場合においても、「失礼しました」が用いられるのは、間違い電話をかけた側が「お邪魔したこと」に対して謝罪しているからである。

5.3 まとめ

以上、別れの場合に用いられる「失礼します」と「失礼しました」という両形式の使用は、述語「失礼する」がもつ「謝罪」という意味に関連していることが明らかとなった。そして、その両形式の使い分けは、話者が「謝罪する事態(の発生時)」をどのように想定するかに関係していることを示した。話者が「謝罪する事態」を現在・未来のことと捉えれば、“ル”形の「失礼します」が用いられる。一方、その謝罪の対象が過去に存在するならば、“タ”形の「失礼しました」で表現すると考えるのが妥当である。

6. おわりに

本稿は、感謝表現や、謝罪表現、労いの表現、祝福表現、別れの表現における

“タ”形と“ル”形という両形式の使用を語用論的に考察した。以上の考察によれば、挨拶表現における“タ”と“ル”両形式の使い分けは、「事態の発生時はいつか」という点だけを観察するのでは不十分であり、語用論的要因も考慮する必要がある、ということが明らかになった。即ち、以下のようにまとめることができる。

■ 挨拶表現における“タ”と“ル”両形式の使い分け

I 感謝表現・謝罪表現

感謝表現や謝罪表現では、基本的に「感謝・謝罪する事態の発生時」を基準にして“タ”形と“ル”形を使い分けている。

- ① 〈発話時現在〉に起こっていることや〈発話時以後〉に起こるであろうことに対し感謝・謝罪する場合は、“ル”形しか用いられない。
- ② 〈発話時以前〉に起こったことに対し感謝・謝罪する場合において、通常“タ”が用いられる。ただし、「感謝の意・謝罪の意を現時点にも有することを表現したい」という語用論的背景を強調すると「感謝・謝罪を述べる側の現時点の判断」に表現の力点が置かれることになり、“ル”形使用が可能である。

II 労いの表現

労いの表現では、基本的に「労う事態の発生時」を基準にして“タ”形と“ル”形を使い分けている。

- ① 〈発話時現在〉に起こっていることや〈発話時以後〉に起こるであろうことに対し労う場合は、“ル”形が使われる。
- ② 〈発話時以前〉に起きた事態に対し労う場合は、通常“タ”形が使われる。ただし、「労いの言葉を受けた側に対し、労いの言葉をかける側が現在、労いの意をもっているということ表現したい」「労う事態が過去のこととして終了せず、今後も継続することとして表現したい」という語用論的背景のもとでは、「労いの言葉をかける側の現時点の判断」という側面が前景化し、“ル”形使用が可能である。

III 祝福表現

祝福表現における両形式の使用は、事態と発生時点との関係からはやや逸

脱し、語用論的要因が主導する場合が多い。

- ①「その事態が現在も今後も継続するように願うこと、または祝福の気持ちを現時点にも有することを表現したい」という発話背景のもとでは“ル”形の使用が好まれる。
- ②祝福すべき事態が行われた直後に、「その事態が既に確定したこと」をあえて表現する場合には“タ”形が用いられる。

IV 別れの表現

別れの表現における両形式の使い分けは、述語である「失礼する」という表現がもつ「謝罪」の意味に起因している。そして、話者が「謝罪する事態（の発生時）」をどのように想定するかと関係している。

- ①謝罪する事態が〈発話時以前〉のことを指す場合には“タ”形が用いられる。
- ②謝罪する事態が〈発話時現在〉〈発話時以後〉のことを指す場合には“ル”形が用いられる。

註

- 1) 『新明解国語辞典（第五版）』によると、「挨拶」とは「人と会った時や別れる時にやりとりする、社交的・儀礼的な言葉や動作」「その場に居る人に対して、こういう訳で来たのだ・これから会を始める・これでおしまいにするといった趣旨の言葉を述べたり儀礼として祝意や謝意を表わしたりする△こと（言葉）」である。本稿では、“タ”形と“ル”形という両形式の表れがある挨拶表現を考察対象とする。
- 2) この点について、金田一（1987: 176）は次のように述べている。
「マシタ」の方がていねいであるのは、「タ」が、相手の行為が自分を益した、ということを実事として認めているからであって、「マス」は、その原行為がなされることについて、また感謝の気持ちがあることについて、断定、認定の度合いが低いことと関係がある。
- 3) 「発話の現場での話者の感謝・謝罪の意が終了していない」が、〈発話時以前〉に起こったことに対し感謝・謝罪する場合に用いられる“ル”形表現の語用論的効果であると、本稿は考えている。この点については、2.3節で論じる。
- 4) 工藤（1998）では、本稿で使っている“タ”形と“ル”形という表記を、それぞ

れ「過去形」・「非過去形」と記述している。そして、ここで取り上げた感謝表現・謝罪表現は、工藤(1998)の〈非動詞的述語〉の分類によると、評価を表す述語に属している。また、この考え方を次章の労い表現「お疲れ様でした・ご苦労様でした」と「お疲れ様です・ご苦労様です」の両形式の使い分けに対しても適用するとしている。

- 5) 言語学を専門とする14人の日本語母語話者による口頭調査である。
- 6) 「ル」形が用いられる際に、『またお越しくださませ』が一緒に用いられやすくなることは、スーパーマーケットや美容院などのサービス業で働いている日本語母語話者への口頭調査により示された。
- 7) 例23は、診察を終えたばかりの外村医師と外で待機していた若い助手との対話である。
- 8) 以下は、〈発話時現在〉に起こっていることや〈発話時以後〉に起こるのであろうことに対し労う用例を挙げる。

■ (工事現場の監督が働いている職工たちに対し)

a.* 皆さん、ご苦労様でした。

b. 皆さん、ご苦労様です。

■ (学校での教頭と教師の会話。教師は警察からの電話を受けたあと)

教師：今から生徒を引き取りに行ってきます。

教頭：a.* あ、そうですか。大変ですね。お疲れ様でした。

b. あ、そうですか。大変ですね。お疲れ様です。

上例のように、労う事態(「現在働いていること」「生徒を引き取ること」)の発生が〈発話時現在〉や〈発話時以後〉であり、“タ”形の使用は不可である。

- 9) 例文の頭の#は、該当の表現が語用論的に不適切であることを示す。
- 10) “タ”形の「おめでとうございました」の使用が許される場合を挙げる。例えば、結婚式の披露宴の終了に際して司会者が使用する、「本日は誠にありがとうございました」という表現である。「本日」という言葉が、「祝福する事態」を「今日の結婚式及びその後に行われた結婚披露宴」に限定し、「結婚(生活)」という事態が終了する」というニュアンスの発生を抑制しているからであろう。
- 11) 言語学を専門とする14人の日本語母語話者による口頭調査である。
- 12) 『新明解国語辞典(第五版)』によれば、「失礼する」という述語がもつ「謝罪」という意味については、「非礼であることをも顧みず(やむを得ず)に何かをしたり相手のすすめをえんきよくに断ったりすることを表わす」とし、一方、「別れ」という意味については、「もっと相手と付き合っているべき所を、自分の都合などで相手に別れを告げること」と解釈している。

- 13) 別れを告げる表現において、「失礼する」という表現以外にも、「さよ（う）なら」という表現もある。通常、将来会えそうにない長い別れの場合に、「失礼する」という表現を使わず、「さよ（う）なら」という表現を用いる傾向が見られる。しかし、「さよ（う）なら」という表現には、両形式の区別がない。そのため、本稿では、この表現は考察の対象から外す。

参考文献

- 金田一秀穂 (1987) 「お礼とお詫びのことば」、『言語』 vol. 16、大修館書店
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』、くろしお出版
工藤真由美 (1998) 「非動詞的述語のテンス」、『国文学解釈と鑑賞』1月号
森田良行 (1988) 「「ありがとうございます」か「ありがとうございました」か」、『日本語類意表現』、創拓社
『新明解国語辞典 第五版』、柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄 (編)、三省堂、1997年

〈キーワード〉 挨拶表現、語用論、タ形、ル形

Pragmatic Analysis of Greetings in Japanese: Usages of “-ta” Forms and “-ru” Forms

Yufen XU

This paper analyses the semantic difference between “-ta” forms and “-ru” forms of the greeting expressions in the following things: thank (Arigatogozaimasu), apology (Moshiwakearimasen; Sumimasen), appreciation (Otsukaresamadesu), congratulation (Omedetogozaimasu), and goodbye (Shitsureishimasu). Grammatically, general usages of “-ta” forms and “-ru” forms are related with the tense of things. However, in the cases of the greeting expressions, the only grammatical analysis is not adequate for an explanation of the actual usages of these forms. This paper focuses on not only the tense, but also the pragmatic functions in order to explain the actual usages of the “-ta” forms and the “-ru” forms in the greeting expressions.